

[スポーツ健康福祉研究センター報告書]

## ブラインドサッカー体験が小学生の視覚障害者観に与える影響について

相川 貴裕<sup>1</sup>

### The Influence of Blind Football Experience on Elementary School Children's Views of the Visually Impaired

Takahiro AIKAWA

#### 1. はじめに

本報告は、ブラインドサッカーを体育の授業内で体験することで、小学生の視覚障害者観が肯定的に変化した結果から、障害当事者との体験の重要性を示したものである。

2021年に実施されたTOKYO2020パラリンピック大会によって障害者スポーツ（パラスポーツ）の関心は高まっており、パラリンピックに関する教育活動が実践され、障害理解教育に用いられている。障害者理解教育の重要性は、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のために必要なものとして挙げられている。よって、これまで以上に「障害のある幼児児童生徒との交流及び共同学習」が目的を持ち、学校教育の中で取り入れられることが推測される。

障害者観の肯定的な変容には障害者との交流が、障害理解教育には体育・スポーツ活動が有効であること言われているが、学校教育の中で、視覚障害パラアスリートとともに実際の競技を行っている報告がほとんど見られず、小学生が行っている報告は見られない。

そこで、今回特定非営利活動法人日本ブラインドサッカー協会（以下：JBFA）の協力を得て、

日本代表選手とJBFAスタッフとともにブラインドサッカーを体育の授業内で実施し、授業前後のアンケート調査により、小学生の視覚障害者観がどのような変容をみせるかを調査した。

#### 2. 方法

##### (1) 調査対象と方法

対象者は広島県A郡S町の小学校4年生（17名）および6年生（44名）の61名である。調査は、小学生に対してブラインドサッカーの体験の授業を2コマ（90分間）実施し、その前後で視覚障害者への意識に関する質問紙調査を実施し、授業後のみ体験してみても感想についても調査した。

##### (2) 体験内容

ブラインドサッカー体験の授業は、2コマ（90分間）で、JBFAスタッフ1名と選手1名によって実施された。内容は、準備体操、ウォーキング（写真1）・ランニング、ボールを使った運動（ドリブル・パス・シュート）であった。

##### (3) 調査項目および分析

調査項目は、基本調査・障害者との接触抵抗感・障害者との今後の関り・障害児者のイメージ・授業の感想である。基本項目は、性別、視覚

<sup>1</sup> 広島文化学園大学人間健康学部

(Faculty of Human Health Science, Hiroshima Bunka Gakuen University)



写真1 ウォーキング

障害者とのスポーツと体験の有無、ブラインドサッカー経験の有無、障害者との接触経験の有無、接触した障害者の障害種について単純集計した。障害者との接触抵抗感・障害者との今後の関り・障害児者のイメージ（11項目）については5件で回答を得て、Wilcoxonの符号付き順位検定によって授業前後の平均値を比較した。授業の感想については、記述内容の意味のまとめりに整理した。

### 3. 結果

#### (1) 基本項目

回答者の性別は、女子が32名（52.5%）、男子が29名（47.5%）であり、障害者との接触経験がある者は10名（16.4%）、ない者は51名（83.6%）であった。参加者全員が視覚障害者とスポーツ体験をしたことも、ブラインドサッカーを体験したこともなかった。

#### (2) 障害者と接触することの抵抗感の変化

接触抵抗感の得点を授業前後で比較したところ、授業前3.79（SD：1.133）、授業後4.06（SD：1.129）であり、有意な得点差は生じていなかった（N=61）。

#### (3) 障害者との今後の関り

障害者との今後の関りの得点を授業前後で比較したところ、授業前2.45（SD：1.066）、授業後1.97（SD：.975）であり、有意な得点差は生じてい

なかった（N=61）。

#### (4) 障害児者のイメージ

Wilcoxonの符号付き順位検定の結果、「①かわいそう」、「②暗い感じ」、「③こわい感じ」、「④元気がない」、「⑤生活するのが難しい」、「⑦一緒に生活は困難」、「⑩スポーツするのはあぶない」、「⑪一緒にスポーツは困難」の8項目が、1%水準の有意差が生じていた。その他の3項目においては、有意な得点差が生じていなかった。

#### (5) 感想

ブラインドサッカー体験型の授業の後に、「ブラインドサッカーをやってみて、どう思いましたか。」と取り組んでみての感想を自由記述で回答を得た。最も多い回答は「楽しかった」（N=27）という感想で、次いで「難しかった」（N=25）、「怖かった」（N=10）が続いた。難しかった、怖かった以外の回答は、「またやってみたい」、「選手はすごい」など肯定的な回答のみであった。また、「声を出すことの重要性」や「助け合うことの重要性」についての記載も見られた。

### 4. 考察

小学生年代に障害者当事者とともに体験授業を行うことで、障害者の関りやイメージは肯定的に変化することが分かった。障害者イメージが固定化される前に、障害者当事者とともに障害者理解教育を実施していくことが重要であると考えられる。全員が初めての視覚障害者とスポーツを行ったこと、全員が初めてのブラインドサッカー体験であったことは、障害者理解教育に重要な機会がないと考えられる。早期に障害当事者と活動をすることが障害者理解につながることから、今後JBFA等視覚障害者スポーツ団体と連携し、視覚障害者スポーツ体験会を積極的に実施していく必要があると考えられる。

### 5. 今後の課題

今後は、体験型の授業により肯定的に変化した

視覚障害者観が、体験会后、時間経過により、どのように変化するのかを調査・検討する必要があると考えられる。また、視覚障害者との体験型授業を複数回行った際の変化や視覚障害者スポーツの種目を変更した際の視覚障害者観の変化について調査・研究していくことも必要であると考えら

れる。本報告から視覚障害者とのスポーツ体験や視覚障害者スポーツの体験の機会が少ないことが示唆されるため、インクルーシブ教育の推進に向け、体験会等の障害者理解教育の機会を創出していくことも課題である。